慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	モーリス・メルロ=ポンティにおける社会理論の可能性
Sub Title	
Author	清水, 淳志(Shimizu, Atsushi)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2009
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.68 (2009.) ,p.151- 153
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成20年度[慶應義塾大学]大学院高度化推進研究費助成金報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000068-0151

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

平成20年度
大学院高度化推進研究費
助成金報告

モーリス・メルロ＝ポンティにおける社会理論の可能性

清　水　淳　志

本年度，高度化推進研究費を受け，筆者が取り組んだ作業として以下の3つを挙げることができる。

1つ目は，「メルロ＝ポンティにおける世界の諸位相―間世界(intermonde)概念を手がかりとして―」(清水2008)の執筆である。この論文の内容は以下のように要約できる。筆者のこの論文における主要目的は，メルロ＝ポンティがわれわれの住む世界をいかなる諸位相のもとにとらえているかを間世界(intermonde)概念を手がかりに探ることにあった。この間世界概念は，Merleau-Ponty1955やMerleau-Ponty1964のなかで使用されている。特に後者でメルロ＝ポンティは，この間世界が知覚的世界と歴史的世界という2つの位相を持つことを指摘している。筆者は，この2つの位相に加えて歴史的世界のなかにもう1つ別の位相として社会的意味世界を読み込む作業を行った。社会的意味世界とは，われわれがシンボルを媒介として他者と相互行為を行う次元だといえる。これにより，メルロ＝ポンティが考える世界を知覚的世界，歴史的世界，社会的意味世界という3つの位相を持つものとして提示することができた。次に問題になるのは，メルロ＝ポンティは間世界概念によってどのような世界のあり方を考えていたかである。具体的にいえば，間世界といった時の〈あいだ〉とはどのような特性を持つものなのかが問題となる。メルロ＝ポンティは，この間世界概念における〈あいだ〉を否定性として描き出すことになる。具体的に先の3つの位相に即していえば，この否定性とは，見るものと見られるものとの〈あいだ〉にある見えないもののことであり，過去と現在の〈あいだ〉で歴史がつくられる際にわれわれが立つ不確定な場としての現在のことであり，さらに自己と他者の〈あいだ〉にある差異のことである。メルロ＝ポンティが考える世界とは，自らの内部にこうした否定性を含み込んだかたちで成り立っているといえる。

論文の後半部では，以上で示したメルロ＝ポンティの世界の諸位相が彼の行為概念とどのような関係を持つかを考察した。メルロ＝ポンティは，Merleau-Ponty 1955のなかで歴史における選択を強調しており，行為を1つの選択としてとらえている。メルロ＝ポンティは，自身の制度化概念のなかにおいても，過去になされた選択を取り上げ直すことによって制度変容が生じると考える。ここで重要なのは，この選択の取り上げ直しが明確な目的を持った主体的行為としてはみなされていないことである。なぜなら，メルロ＝ポンティが考える行為とは，先に述べた否定性という世界の構造に規定されたかたちで存在するものだからである。上述した3つの否定性のうち，ここで問題となるのは，歴史的世界における現在性と社会的意味世界における他者性である。われわれの行為は，現在において，さらに他者との関係のなかでなされており，そのため自らの意図を超えたかたちで意味づけられることになる。メルロ＝ポンティにおいては，われわれの選択としての行為は，自らの意図とは別様に取り上げ直されること

になるのである。（本論文は，『人間と社会の探究』第66号2008年に掲載された。）

2つ目の作業は，学位請求論文研究計画書の執筆である。この計画書では，筆者のこれまでの作業を見直すと同時に，今後の研究の方向性を示すことを目的とした。まず後者から述べておこう。具体的には，研究手法に関してメルロ＝ポンティと社会理論の関係を以下の3つに整理した。①メルロ＝ポンティ自身が，社会理論あるいは政治哲学として執筆した著作（Merleau-Ponty1947, 1955など）を取り上げる研究手法。使用できるテキストが限られることや，テキストの時代制約性をどう処理するかなど多くの問題点がある。②メルロ＝ポンティの著作を社会理論として読むという研究手法。メルロ＝ポンティが直接的には社会理論としては提示していない身体論や言語論も参照することができる。残念ながら，これまでの先行研究にあってこの手法を採るものはあまり多くはなかった。③メルロ＝ポンティとほかの社会理論家，たとえばG・H・ミードやピエール・ブルデューなどとの接合を探る研究手法。その際，メルロ＝ポンティの時間論，習慣論，制度論などが問題になってくる。メルロ＝ポンティが哲学者ということもあり，②同様あまり先行研究は多くない。筆者は，①から③のうち，博士論文の研究手法として②を採用したいと考えている。①は，社会思想史の分野における先行研究として言及するにとどめる予定である。③については，補論として位置づけることを考えている。

もう1つ，この計画書では既存の2本の論文（清水2007, 2008）を見直す作業を行った。「社会学における制度論―メルロ＝ポンティとの「交差」から―」（清水2007）では，パーソンズ，盛山和夫，バーガー＆ルックマン，中島道男（デュルケム）の制度論を概観した後，メルロ＝ポンティの制度化概念を取り上げた。ただ，それぞれの論者が同じ制度という言葉を使っていても，それによってとらえようとする社会現象の位相は異なっており，清水2007では，この点にあまりに鈍感であった。先に紹介した清水2008では，後半部で制度変容の問題を取り上げた。しかし，前半部の議論とのつながりがうまくいかず，制度変容については曖昧な結論しか導き出すことができなかった。また，間世界概念において，歴史的世界から社会的意味世界を取り出すという作業が強引なものとなってしまったこと，否定性という用語の哲学的意味を無視して使用してしまったことなども，反省点として挙げることができる。特に，後者に関しては，哲学と社会理論の違いにかかわる問題を含んでいるといえる。（この研究計画書は，2008年11月に社会学研究科に提出され，受理された。）

3つ目の作業は，第3論文「オニール社会学の再構成―社会学におけるメルロ＝ポンティ受容の一事例として―」（仮題）の準備である。この論文は，修士論文で扱ったカナダの社会学者ジョン・オニールを取り上げるものである。まず，オニールの全体像をつかむために書誌を作成した。オニールの関心は，ヘーゲル的マルクス主義に始まり，現象学的社会学，フランクフルト学派，フロイト，エスノメソドロジー，ポスト・モダニズム批判など多岐にわたっている。ただ，筆者のオニールへの関心は，あくまでも社会学においてメルロ＝ポンティを受容したことにあるのであり，本論文でもそれを中心にする予定である。論文の構成としては，まずオニールの身体の社会学(O'Neill 1985)を取り上げる。オニールの身体の社会学は，ハーバーマスの議論を下敷きにしてそこにメルロ＝ポンティの生きられた身体を付け加えたものであるといえる。また，身体疎外の問題を「生―権力」（フーコー），「商品の記号論」（ボードリアール），「リビドー」（フロイト）といった概念を援用してさまざまな角度から論じている。ただ，オニールの身体の社会学の基本枠組み（ハーバーマス＋身体）は，現在の社会理論のなかでは，さほど目新しいものとはいえない。問題は，ここに何をプラス・アルファするかである。筆者としては，オニールがメルロ＝ポンティの制度化概念を取り上げていることに注目したい。具体的には，以下

の2点である。1つは，オニールがメルロ＝ポンティの制度化概念をヴィーコの人間的制度の概念につなげようとしていることである。もう1つは，オニールが，O'Neill1972のなかで制度化概念を社会批判のための武器として使おうとしていることである。特に後者に関しては，ハーバーマスのコミュニケーション的行為の理論との対比のなかで，新たな社会批判のあり方が提示できれば，と今現在は考えている。

参照文献

Merleau-Ponty，M.，(1947). *Humanisme et Terreur; Essai sur le Problem Communiste,* Gallimard（合田正人訳．ヒューマニズムとテロル　共産主義の問題に関する試論．2002，みすず書房）

————, (1955). *Les Aventures de la Dialectique*, Paris, Gallimard（滝浦静雄・木田元他訳．弁証法の冒険．1972，みすず書房）

————, (1964). *Le Visible et l'invisible, suivi de note de travail*, Paris, Gallimard（滝浦静雄・木田元訳．見えるものと見えないもの　付・研究ノート．1989，みすず書房）

O'Neill, J., (1970). *Perception, Expression and History; The Social Phenomenology of Maurice Merleau-Ponty*, Evanston: Northwestern University Press（奥田和彦編，宮武昭・久保秀幹訳．メルロ・ポンティと人間科学．1986，新曜社）

————, (1972). *Sociology as a Skin Trade; Essays towards a Reflexive Sociology*, Heinemann（須田朗・宮武昭他訳．言語・身体・社会―社会的世界の現象学とマルクス主義―．1984，新曜社）

————, (1985). Five Bodies; The Human Shape of Modern Society: Cornell University Press（須田朗訳．語りあう身体．1992，紀伊国屋書店）

清水淳志，(2007)．社会学における制度論―メルロ＝ポンティとの「交差」から―．人間と社会の探求，64.

————, (2008)．メルロ＝ポンティにおける世界の諸位相―間世界(intermonde)概念を手がかりとして―．人間と社会の探求，66.

現代インド，デリーにおける不可触民解放の考察

――清掃人カーストを中心に――

鈴　木　真　弥

1.　研究課題

近年の著しい経済発展を背景に国際社会においてインドの存在が高まるなか，インド社会認識の枠組みが改めて求められてきている。インドを含む南アジアにおいては，宗教社会的な価値体系や構造（ヒンドゥー教の理念に基づき，バラモンを頂点とするカースト・ヒエラルヒー）が支配的であるという理解がかつては主流であった。特にカーストをめぐる現象は，インド社会固有のものとして語られ，ほかの社会との比較よりも本質主義的な観点からの議論が活発に行われた。それに対して，1980年代後半からは，従来のインド研究が前提としてきたインド社会の非歴史性，不変性に批判がなされ，より動態的なプロセスに着目するインド社会認識の試みがみられた。

本研究が目指すのは，現代インドにおける不可触民差別，カースト問題の再考である。独立後の民主主義の歴史の文脈のなかで，それらがどのように変わりつつあるのか(あるいは変わらないのか)につい